

実践まとめシート（１年次）

研究グループ	高等部	実践グループメンバー	山崎、石橋、有馬、藤田、米持、小林
--------	-----	------------	-------------------

実践タイトル	
高等部生徒のエージェンシー発揮に向けた高校生との交流及び共同学習の在り方の検討	
Ⅰ 問題と目的	
交流及び共同学習は、障害の有無に関わらず生徒同士が共に学ぶ機会である。近年は、ノーマライゼーション（障害者などの社会的弱者を特別視せず、誰もが同等に生活ができる社会を目指す）の考え方にに基づき、特別支援学校高等部学習指導要領において積極的な交流を行うよう示されている（文部科学省，2019）。本校高等部では、地域の高校生とスポーツを通じた交流の機会を数年にわたり継続的に設け、スポーツを起点として同年代の他校の生徒との学習機会を設定している。一方で、年度内でのスポーツ交流学習の回数は１回に留まり、教師先導での学習活動となっていた課題がある。そのため、本校生徒が主体的に活動できるような授業改善の視点が求められている。 OECD（2018）は、今後の社会を生き抜くうえで生徒エージェンシー（以下、エージェンシー）の重要性を示している。エージェンシーとは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」のことであり、他者の行動を受動的に受け止めるのではなく、自ら主体的に行動することが求められている。高等部生徒は、３年間の限られた期間で学校を卒業した後、主体的に人生を切り拓いたり、自己の目的を達成したりするためには、自ら他者に働き掛け、コミュニケーションを取る力を身に付ける必要がある。交流及び共同学習は、卒業後の社会生活でも必要なエージェンシーを発揮する学習活動として適していると考えられる。 そこで本実践は、特別支援学校と地域の高等学校を学びの場とし、学びを生かすサイクルをとおして、コミュニケーション能力に焦点を当てた高等部生徒のエージェンシーの発揮に向けた交流及び共同学習の在り方を検討することを目的とした。	
Ⅱ 実践方法	
１ 対象生徒のコミュニケーション面に関わる実態について 本校高等部生徒は２１名であるが、分析対象の生徒については、本実践グループの教員で検討し、対象者を２名とした。対象とした理由を以下に示す。 生徒Ａは、下記のプロフィールにも書かれているように、運動や祭りが好きであるため、グループを盛り上げて積極的な活動参加が期待されたため、対象とした。 生徒Ｂは、自らコミュニケーションを取ることに抵抗感がある。中学校特別支援学級在籍時代は陸上競技部に入部していた経験があることから、高等学校の陸上競技部の生徒と関わりのきっかけになる可能性が高い。本実践により自らコミュニケーションを取ることができるようになることを目指し、対象とした。 対象者２名のプロフィールについて、本校の令和６年度「個別の教育支援計画」から引用した。以下の表１、２に示す。	

表1 生徒 A のプロフィール

障害名	自閉症スペクトラム障害
できること・好きなこと	・同年代の生徒に働き掛けたり受容したりして、交友関係を築くことができる。 ・ねぶた祭りなど、祭りが好きである。 ・運動をすることが好きである。
課題・苦手なこと	・相手の立場や状況に応じた言葉遣いや振る舞いを学習中である。 ・口頭のみで指示を理解することや、困ったときに自分の気持ちを伝えることが苦手である。

表2 生徒 B のプロフィール

障害名	自閉症スペクトラム障害
できること・好きなこと	・全体指示を聞いて行動することができる。 ・周りの人とコミュニケーションを取り、協力して作業ができる。 ・慣れた人には、自分から言葉を掛けることができる。
課題・苦手なこと	・対人関係で困ったときやトラブルがあったとき、自分から教師や周りの人に相談することが難しい。 ・自分からコミュニケーションを取ることに抵抗感がある。

2 実践の手続き

交流校は近隣の高等学校のスポーツ科学科の第2学年生徒37名である（以下、高等学校、高校生とする）。これまで相手校とは、毎年、年1回のスポーツ交流を実施していた。

今年度の校内研究テーマを踏まえて、学びを生かすサイクルにするために計2回の交流学习を設定した。1回目の会場を高等学校、2回目は本校とした。

1回目は毎年7月に行われる県特別支援学校総合スポーツ大会に向けた技能向上を目的とするため、本校生徒が今年度実際に出場した4競技（ソフトボール、サッカー、陸上競技、フライングディスク）に分かれて、技能についてアドバイスを受ける交流を計画した。

2回目は昨年度も取り組んだ「現代的なリズムのダンス」をテーマとした交流を行った。関係を築きやすいよう、前回と同様の4グループに分かれ、一緒に見本動画を見てダンスをする計画をした。

3 評価方法

①録画映像による評価

事前や事後学習、当日の様子を録画した。録画した映像を実践グループメンバーで協議し、対象生徒2名と高校生との関わりや発言を見取った。

②アンケート調査による評価

本校生徒に対し、各回の交流前後にアンケートを実施し、交流に対する考えの変化を見取った。

アンケート方法として、「障害児との交流及び共同学習に関する意識評価尺度改訂版」（小野ら〈2013〉、小野ら〈2015〉）を参考にグループで内容や評価方法を検討し、アンケートを作成した。アンケートにおける変化の見取り方は20問の設問に対し、5段階評価（とても思う：2点、思う：1点、どちらでもない：0点、思わない：-1点、まったく思わない：-2点）で回答する方法とした。設問内容は以下の表3の通

りである。

表3 アンケートの設問内容について

	設問内容
1	事前：〇〇（交流校）の生徒と、関わってみたいと思う 事後：〇〇（交流校）の生徒と、もっと一緒にいたいと思う
2	〇〇（交流校）の生徒と、仲良くしていけると思う
3	〇〇（交流校）の生徒のために、自分にできることがあると思う
4	〇〇（交流校）の生徒と、授業を一緒に受けることが楽しみだと思う
5	ゲームなどで、〇〇（交流校）の生徒と同じチームになってもいいと思う
6	授業で教室に来たときに、〇〇（交流校）の生徒と同じグループになってほしいと思う
7	〇〇（交流校）の生徒と一緒に協力していくことができると思う
8	〇〇（交流校）の生徒に誘われたら、一緒に遊ぶと思う
9	〇〇（交流校）の生徒に、自分から話し掛けることができると思う
10	〇〇（交流校）の生徒の得意なことを知りたいと思う
11	〇〇（交流校）の生徒と交流することを、もっとしたいと思う
12	〇〇（交流校）の生徒と一緒に、作品を作ってみてみたいと思う
13	〇〇（交流校）の生徒と一緒に、歌や合奏をしてみたいと思う
14	〇〇（交流校）の生徒は、自分たちとは違う生徒だと思う
15	〇〇（交流校）の生徒は、一緒に勉強するのは無理だと思う
16	〇〇（交流校）の生徒が考えていることが分からないと思う
17	〇〇（交流校）の生徒とどんな話をしたいかわからない
18	〇〇（交流校）の生徒とは気持ちが通じにくいと思う
19	〇〇（交流校）の生徒の話したいことが分かると思う
20	〇〇（交流校）の生徒のしたいことが分かると思う

※14～18番は否定形の設問のため、（とても思う：－2点、思う：－1点、
どちらでもない：0点、思わない：1点、まったく思わない：2点）となる。

4 倫理的配慮

対象生徒が所属する特別支援学校は、在籍児童生徒の学びと成長を保障する他に教育実習や研究の場としての使命も担っており、事前に十分に説明した上で、保護者より研究協力及び成果公開の同意を書面で得ている。また、校内で個人情報の保護をはじめとする倫理的課題について十分に検討した上で本研究の実施と公開にあたっている。

Ⅲ 指導の実際

交流学习の様子として、スケジュールを表4に、具体的な様子を表5に示す。

表4 スケジュール

日にち	学習内容
8月27日	事前学習①（交流学习1回目について）
9月 3日	事前学習②（交流学习に向けた準備）
9月17日	事前学習③（交流学习に向けた準備）
9月20日	交流学习1回目
9月21日	事後学習

10月31日	事前学習①（交流学习 2 回目について）
11月 5日	事前学習②（交流学习に向けた準備について）
11月14日	事前学習③（交流学习に向けた準備について）
11月19日	交流学习 2 回目
11月20日	事後学習

表5 具体的な様子

場所・対象	内容
本校体育館 8月27日 本校生徒	・事前学習①（交流学习 1 回目について） アンケート調査（左）、陸上競技グループでの話し合い（右）
本校 グラウンド 9月3日 本校生徒	・事前学習②（交流学习に向けた準備） サッカー練習の様子
本校体育館 9月17日 本校生徒	・事前学習③（交流学习に向けた準備） サッカーグループ練習（左）・陸上競技グループ話し合い（右）の様子
高等学校 9月20日	・交流学习 1 回目 場所：高等学校グラウンド 内容：4競技（ソフトボール、サッカー、陸上競技＜短距離走＞、フライングディスク）に分かれ、高校生から競技の上達ポイントやルールなどに関してのアドバイスを受ける。

本校生徒 と 高校生	左からフライングディスク、陸上競技の様子 左からソフトボール、サッカーの様子 ソフトボール集合写真の様子
本校体育館 9月21日 本校生徒	事後学習 各グループにおいて、振り返り及び事後アンケート調査を実施。
本校体育館 10月31日 本校生徒	事前学習①（交流学习 2 回目について） 2 回目の交流学习に向けた準備。（進行の仕方や一緒に取り組む現代的なリズムのダンスの練習など。） ソフトボールグループの話合い（左）、サッカーグループのダンス練習（右）の様子
本校体育館 11月5日	事前学習②（交流学习に向けた準備について）

本校生徒	  ソフトボールグループ（左）、フライングディスクグループ（右）のダンス練習の様子
本校体育館 11月14日 本校生徒	・事前学習③（交流学习に向けた準備について）   サッカーグループの打合せとダンス練習の様子
本校体育館 11月19日 本校生徒と 高校生	交流学习 2 回目 ・交流 1 回目と同じ競技の4グループに分かれて、一緒に「現代的なリズムのダンス」をする。   左からフライングディスクグループ、陸上競技グループのダンスの様子   左からソフトボールグループ、サッカーグループのダンスの様子



陸上競技グループ集合写真の様子

本校体育館 11月20日 本校生徒	事後学習 各グループにおいて、振り返り及びアンケート調査を実施。
-----------------------------	-------------------------------------

IV 結果

1 録画映像による評価

実践グループメンバーで協議し、対象生徒2名（A：ソフトボール、B：陸上競技）の活動時の高校生との関わりや前向きな発言と思われるエピソードを以下の表6と7に示す。

表6 1回目 9月20日（高等学校）でのエピソード

生徒 A	○キャッチボールに取り組んだ後の場面で、 高校生：「キャッチボール難しい？」 生徒 A：「難しくありません。」 ○同グループの友達がティーバッティングをしている場面で、 生徒 A：「これぞまさしく交流。しまっていくぞーと言いたい。」 ○高校生が投げるトスバッティングで、ボールを飛ばしたとき、 生徒 A：「気持ちいい。」 ○守備練習でノックのボールを捕球し、目標の高校生まで投げられたとき、 生徒 A：「（俺）野球部になるかな。」 ○守備練習で友達がフライ（飛球）の捕球を失敗したとき、 生徒 A：「こういうときもある。これも勉強だ。ドンマイドンマイ。」 ○全員がフライを捕球できたとき、 生徒 A：「（グループのみんな）今日は合格。」
生徒 B	○生徒 B：「（友達の走りを見て）〇〇さんめちゃくちゃ速いなー。〇〇さんめちゃくちゃ気合い入っているなー、気合いが入っていることはいいことだ。」 ○教師：「（走り終わった後の休憩時、活動してみて）どう？」 生徒 B：「やっぱ〇〇（交流校）ってもともと強い（速い）ってこと知っているんで。」 ○生徒 B：「（高校生や友達のラダートレーニングを見て）うまい。」 教師：「（高校生にラダートレーニングを）いいジャンプって褒められていたよ。」 生徒 B：「じかに褒められるの慣れてないです。」 ○1回目のリレーの順番を高校生と決めるときに、 高校生：「2番か4番どっちがいいですか？」

	生徒 B：「(グループの友達に) どちらがいい？」 友達：「4 番。」 ○2 回目のリレーの順番を高校生と決めるときに 高校生：「もう 1 回同じ順番でやる？」 生徒 B：「はい。」 高校生：「いいよ。」
--	--

1 回目は、本校生徒全員が経験済みの競技であったため、活動内容に対して意欲的に取り組む姿が多く見られたが、本校生徒からの積極的なコミュニケーションは見られず、高校生からの言葉掛けに対しての返答が多かった。

表 7 2 回目 11 月 19 日 (本校) でのエピソード

生徒 A	○高校生と離れたところで、生徒 A と教師が 生徒 A：「ダンスをアレンジしてもいいですよって言いたい。」 教師：「じゃー、相談じゃない？ (グループ) リーダーに」 生徒 A が高校生に近付いて 生徒 A：「〇〇さんアレンジしても OK なんで。」 高校生：「どうも、がんばります。」 生徒 A：「自分もアレンジするんで」 高校生：「がんばりますね。」 高校生から離れた場面で教師と 教師：「何て言われたの？」 生徒 A：「OK ですって言っていました。」
生徒 B	○ダンスの休憩時間に教師、生徒 B、高校生の 3 人が集まっている場面で 教師「高校生と交流深めてみたら？なんでそんなにダンスうまいんですか？とか。」 生徒 B「えー、無理です (恥ずかしがる)。」 教師「(高校生に向かって) ダンスの経験があるんですか？体育でやったことありますか？」 高校生「体育でもありますが、小学校からやっていました。」 生徒 B「ダンスクラブですか？〇〇小学校で、ダンスクラブありましたよね？」 高校生「違うところでやっていました。」 生徒 B「だから、うまいんですね。」 教師「(高校生に向かって) 陸上はいつからやっていましたか？」 高校生「陸上も小学校からやっていました。」 生徒 B「すげえ。ダンスと陸上を両立させていたんですね。何なら、ダンスのこつを教えてほしい。」 他の同級生が入ってきて 生徒 B「(入ってきた同級生に向かって) 〇〇さんだよ。ほら、陸上で足が速い。」 生徒 B「(高校生に向かって) そう思えば、今度ぜひ、200 メートル走のこつを教えてください。」 高校生「えー (恥ずかしがる)。」

2回目は、エピソードの他に、積極的に自己紹介を行うなどの様子を確認することができた。各グループのリーダーが中心となって活動を進めたため、必然的に高校生へ説明をするなどのコミュニケーションが多く見られた。また、各グループで振り付けの一部を一緒に考えようとしたことで、高校生と「この振り付けがいいね」など、前回以上にコミュニケーションが多くなる展開となった。

2 アンケート調査による評価

生徒Aの質問項目別の結果を図1に示す。

ほとんどの質問に対して、「とても思う：2点」と回答した。2回目の事前では、否定形である14～18の質問に対して、「とても思わない：－2点（逆転点数）」と回答した。

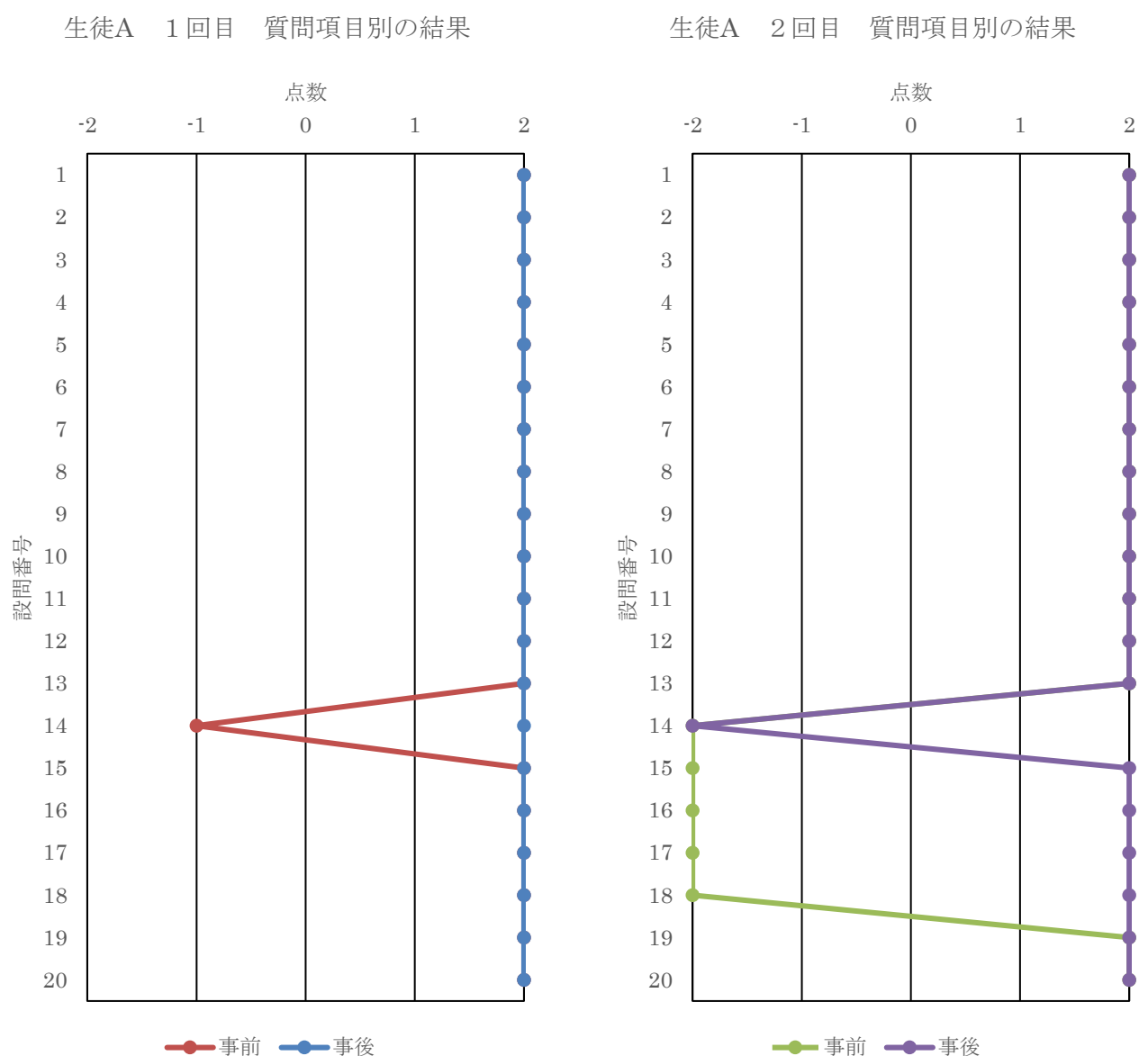


図1 生徒Aの質問項目別の結果

生徒 B の質問項目別の結果を図 2 に示す。

1 回目及び 2 回目ともに、ほとんどの質問において、事後の点数が事前の点数を下回ることなく、点数が上がった。また、1 回目に比べて 2 回目の方が、全体的に点数が高い結果となった。

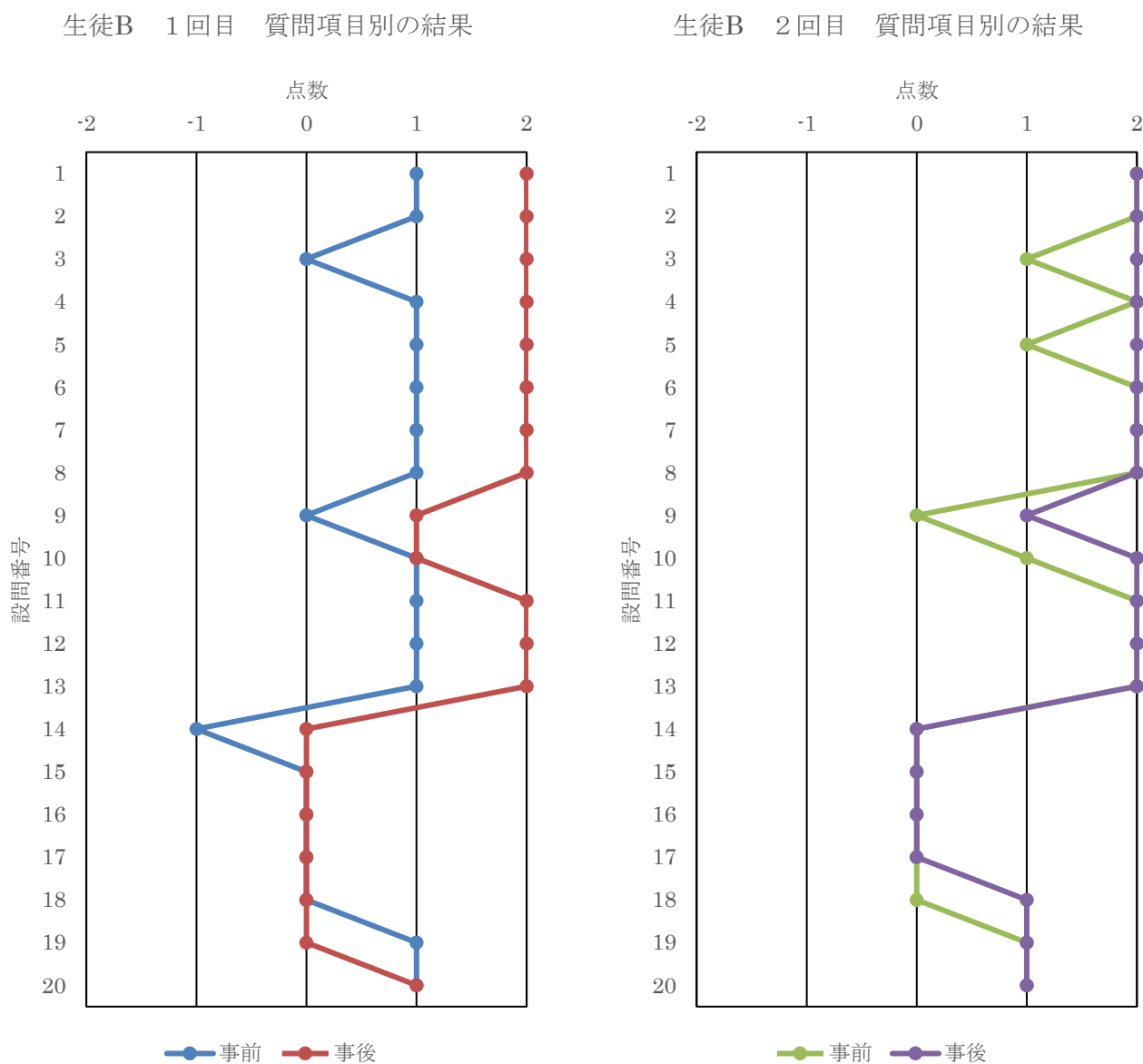


図2 生徒 B の質問項目別の結果

V 考察と課題

本実践は特別支援学校と地域の高等学校を学びの場とし、学びを生かすサイクルをとおして、コミュニケーション能力に焦点を当てた、高等部生徒のエージェンシーの発揮に向けた交流及び共同学習の在り方を検討することであった。

エピソードでは、1 回目は本校生徒からの積極的なコミュニケーションが見られず、高校生からの言葉掛けに対する返答が中心だった。一方、2 回目では自分からコミュニケーションを図る場面が多く観察された。また、生徒 B は 1 回目・2 回目ともに、事前アンケートと比べて事後アンケートの得点が増加し、高校

生との交流及び共同学習に対して肯定的なイメージをもったと考えられる。以下に、その要因として考えられた内容を示す。

1つ目は、心理的安全性の確保である。1回目と2回目を同じグループ編成としたことにより、2回目は既に知っている高校生との交流が可能となった。また、2回目は本校の体育館という慣れ親しんだ場所での活動であったことや各グループに教師を配置して必要な支援を行ったことで、安心して交流できたと推察される。

2つ目は、教師が会話のきっかけを作ることで、高校生と自然な対話が促進されたことである。生徒Aは高校生に伝えたい気持ちを教師に相談し、教師の促しによって自ら高校生とコミュニケーションを取ることができた。また、生徒Bは、教師が生徒Bの近くで高校生と会話を始め、生徒Bに関連する話題を提供することで、自然に会話に参加できた。このような高校生との対話経験が、交流への肯定的な捉えにつながり、アンケート結果に反映されたと考えられる。

3つ目は、学びを生かすサイクルとして、本校生徒がアドバイスする立場として交流する機会を設けたことで、主体的な活動場面を創出できたことである。各グループのリーダーを中心にダンスの練習を進行したため、必然的に高校生への説明など、コミュニケーションの機会が増加した。生徒Aの2回目のエピソードは、説明するきっかけがあったことで、自発的なコミュニケーションが生まれた場面であったと考えられる。この行動は、エージェンシーにおける「責任ある行動」を示すものであり、事前学習の成果を発揮する場になっていたと考察する。

また、参考として、表8は高校生の感想、図3は「アンケート結果」を記載した。

表8 交流後の高校生の感想

1回目	・＜守備練習で＞フライをキャッチするのに苦戦していた子が帰るまでに取れるようになった！楽しかったと言ってくれた。（ソフトボール） ・生徒同士で技術を高め合っていて楽しんでいるのが伝わってきた。交流終了後にとても楽しかったと言ってくれてうれしかった。（サッカー） ・いつも通りに接したことで相手も同じ心をもっていることに気付いて、気持ちよく一緒に陸上競技ができたため。その後に楽しかったとみんなが言っていたため。（陸上競技） ・いろいろ話すことができ、仲良くなれた。（フライングディスク）
2回目	・最後のダンスのポーズなどとても爆笑してくれて、たくさん話し掛けてくれて、会うたびに話し掛けられたので楽しかったと思います。（陸上競技） ・前回と同じグループでやったので話せる人が多く、みんな笑顔でできました。（フライングディスク） ・分からないところはありますか？と聞かれて、サビを教えてほしいとお願いをしたら丁寧にリズムを数えながら教えてくれた。（ソフトボール） ・2回目だったけど、最初は緊張して話し掛けたりできなかったけど、みんな楽しそうに教えてくれて、ほんとにうれしかったし、楽しかったです！〇〇さんが水分補給をすごく気にしてくれて、優しくてうれしかったです。（サッカー）

グループ	名前	1回事前	1回事後	2回事前	2回事後	グループ	名前	1回事前	1回事後	2回事前	2回事後
ソフト	Cさん	13点	15点	20点	26点	ソフト	Eさん	34点	48点	46点	46点
サッカー	Dさん	30点	29点	32点	46点	サッカー	Fさん	27点	48点	44点	43点

図3 アンケート結果（合計点数）

アンケート結果から確認できるように、事前と事後の合計点数において上昇が見られ、交流に対する肯定的なイメージに転じていたことが分かった。

高校生側の考察として、1回目の交流では本校生徒と同様に初対面であり、また障害のある生徒との関わりが初めての高校生も多かったため、緊張していたと考えられる。しかし、自分の得意な部活動についてアドバイスする内容であったため、高校生は積極的に活動をリードすることができた。そのため、当初は説明中心のやり取りだったものが、時間の経過とともに本校生徒への理解が深まり、「順番どうする？」、「いいよ」といった友達同士のような自然な会話が生まれるようになった。

11月の2回目の交流では、お互いに顔見知りとなっていたため、前回より緊張感が少なくなり活動することができた。9月とは異なり本校が主催して活動を進めたことで、高校生はより気軽な気持ちで参加できたと思われる。ダンスが苦手な生徒もいたものの、本校生徒の熱心な姿勢に触発され、「一緒にやってみよう」と積極的に参加する生徒も見られた。また、各グループで振り付けの一部を一緒に考える機会を設けたことで、「この振り付けがいいね」、「これ面白そう」といった声が聞かれ、前回以上に活発なコミュニケーションが交わされる結果になったと考える。

本実践の課題を以下に示す。

生徒Bのアンケート結果について、ほとんどの質問に対して、「とても思う：2点」と回答した。2回目の事前では、否定形である14～18の質問に対して、「とても思わない：－2点（逆転点数）」と回答した。これは、アンケートの意味を的確に理解せずに回答した結果であると考えられる。生徒の実態に応じて、適切に評価できるよう、方法を検討する必要がある。

エピソード以外の生徒の様子について、否定的な発言が見られる場面があり、生徒の負担になっていたことが考えられた。今回は特に現代的なリズムのダンスにおいて、より早い段階から取り組んでおく必要性を感じた。各グループで一から振り付けを創作したり、練習時間を更に確保したりすることによって、より本校生徒が自信をもって交流当日に臨むことができたのではないかと考えられる。また、各内容において生徒の得意・不得意もあるため、得意な生徒をバランスよく各グループに配置するグルーピングの検討も必要であったと感じた。

以上より、交流及び共同学習において、「心理的安全性の確保」、「教師の生徒同士をつなげる環境設定」、「アドバイスする立場での交流」が、エージェンシーに関連する行動を引き起こし、高校生との交流に対する肯定的なイメージを生み出したと考えられる。今後の課題として、評価方法を見直すとともに、生徒がより安心して自信をもって交流に参加できるような授業づくりを進めていく必要がある。

VI 参考・引用文献

- ・文部科学省：特別支援学校高等部学習指導要領，2019.
- ・OECD：OECD Future of education and skills Education 2030，2018.（2025年3月25日取得，
<https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD>

_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf)

- 小野智弘, 重山孝雄, 富山友加里, 戸ヶ崎泰子: 障害児との交流及び共同学習に関する意識評価尺度の改訂. 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要 第 21 号, 67-78, 2013.
- 小野智弘, 児玉かおり, 日野文貴: 特別支援学級の生徒との交流及び共同学習に対する中学生の意識: 定期的な交流及び共同学習をとおして. 宮崎大学教育文化学部附属協働開発センター研究紀要 第 23 号, 13-25, 2015.